

がん克服に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4648

がん克服に向けて

To Aim at Conquest of Cancer

金沢大学がん研究所腫瘍制御学化学療法分野・分子標的薬剤開発センター

佐々木 琢 磨

金大を卒業後、当時珍しかった「核酸の有機化学」の研究に魅かれ北大の水野義久先生の門下に入った。核酸化学を大いに学んだが、そのうちに純粋の有機化学よりも「生理活性物質」の化学への魅力にひかれ、興味は次第に「化学療法」に移っていった。大学院修了後は国立がんセンター研究所の研究者としてがん化学療法の研究に従事する事になった。振り返ってみると、私は難しい事はあまり考えずに「がん」という神秘の世界、というより忌み嫌われる世界に、怪い興奮とともに新鮮な気持ちで入っていったように思う。ある先生は「がんの世界は泥沼だよ」といって、いくらやっても研究の成果を得るのは難しいから止めた方が良くと忠告してくれた。しかし、がんに魅せられ、がん研究者の端くれとしておよそ半生である。その間、がん研究も進展し治療も改善され、がんは決して特別の忌むべき病気ではなく、どこにでもある普通の病気となってきた。それにしても、20世紀の半ばから増加し始めたがんはとどまることを知らないようだ。2000年のがん死亡者は約30万人、死亡原因の30%にも達する。高齢化社会の進行とともにがん死亡数は今後も増加していくであろうし、増えているがん、難治性がんに対する対策を立てないと、がんは本格的に増え続けることになる。

21世紀、がんを克服するために我々がなすべきことは単純明快である。がんの予防対策を実行し、治療成績を向上させることである。がん予防の道りは立っている。がんを予防するための生活習慣を実行し、早期にがんを発見するためがん検診を徹底することである。アメリカではすでに、がん予防への努力の成果が実って年齢補正の人口10万人対「死亡率」が減少し、がんの「罹患率」そのものも減ってきた。がん予防は1人1人の心がけの問題である。それだけ難しいともいえるが、がん予防こそ、最も確実ながん克服法であることは確かである。ここ宝町キャンパスも2004年1月から「キャンパス内全面禁煙」を宣言した。角間キャンパスを含む全学的な禁煙対策が望まれる。

がん克服のもう1つの課題はがん治療である。この10年間におけるがん化学療法の基礎的研究の進歩には目覚ましいものが

ある。最も注目すべき点は基礎研究の進歩によってがん化学療法の新しい標的が明確にされたことである。第63回日本癌学会総会は2004年10月、桑野信彦会長のもと「がん征圧への新しい幕開け」という主題のもとに福岡で開催された。集まった一般演題は2149題で、がん化学療法の領域でも、がん遺伝子産物、シグナル伝達系、増殖因子とレセプター、転写因子、DNA修復・複製、細胞周期、耐性・感受性因子、細胞形態形成、膜酵素、テロメア、アポトーシス、薬剤輸送、転移と血管新生、各種サイトカイン、分化抗原・分化誘導因子とレセプターなどについて最新の研究成果が報告された。焦点となる大半の話題は10年前の京都で開催された第54回総会のそれとは大幅に異なっている。分子生物学の進歩によりがんの分子機序が明らかにされつつあり、がん治療において従来の外科治療、放射線治療、抗がん剤化学療法に加え、分子標的治療への期待が高まっている。がん化学療法の研究分野は分子標的治療を加えて急速に拡大し、生化学、化学、薬理学はもとより、分子生物学の知識抜きでは語れなくなった。がん化学療法の研究は厚みを増し且つ興味あるテーマが山積している状況であるが、この学問の進展の中で独創性があり且つ臨床にも還元できる成果を得るためには相当な努力と覚悟が必要である。我が国では難治性疾患に対して何としても効く薬を開発しようとする情熱を持つ研究者が極めて少ない。がん化学療法をさめた目でしか見ない研究者が多い。これでは良い薬や治療法の開発は難しい。創薬や臨床に真に有効な治療法の開発に情熱を持つ研究者を養成するためにも化学療法を中心とするがん治療分野の研究を進展させる必要があり、そのための環境作りが急務であると考ええる。

金沢大学がん研究所附属分子標的薬剤開発センターは、がんの分子標的治療にとって有望な分子標的を見だし、それを新しい薬剤及び治療法の開発に応用することを目的として平成9年に設置され、がん化学療法の新たな展開を拓くべく現在奮闘中である。当センターの運営にさらなるご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。